

高津区おはなしアーカイブ

●黒川 金次 (くろかわ きんじ)さん

大正12年生まれ 95歳
川崎市高津区北見方在住



◆ご家族のお話を

生まれも育ちも北見方です。

両親と兄弟9人の11人家族でした。元気で働き者の父のもとに、私が長男で弟が4人、妹が4人いました。一番下の妹とは15歳離れていましたが、今は私以外皆亡くなってしまいました。一番早く亡くなった弟は54歳のときで、残された子どもが可哀想でした。この弟は昭和50年頃の建設ブームで無理がたたリ体を壊してしまったのです。3年前まで生きていたすぐ下の弟は、酒もタバコも一切やりませんでした。人間は若いときから摂生していると長生き

するものですね。私は食事には今も気を付けています。

◆小さい頃の思い出は

家が農家でしたから両親の仕事を手伝いました。米や麦はもちろん、野菜は大根、カブ、人参、果物は桃を作っていました。忙しくてねえ、友だちと遊んだことや、兄弟で仲良く遊んだ思い出はありません。

小学校6年生の頃に学校から久本の田んぼまで、集団で苗場の害虫取りに行かされました。軍国主義の表れですよ。ただ、修学旅行だけは嬉しかったねえ。5年生のときから、お金を積み立てていて、6年生になったら川崎市内の子どもたち500人が臨時列車に乗って、伊勢、京都、奈良と3泊4日の旅に出かけたのです。まあ、列車と言っても、当時は石炭で動くものだったので窓を開けていたらトンネル内で顔が真っ黒ですよ(笑)。でも、兄弟の中で行けたのは私だけですよ。1年下の弟は積立金をしていても、支那事変が勃発し「この非常事態に臨時列車などはまかりならん」ということで行けなくなってしまいました。

遠足も楽しかったですよ。日帰りで向ヶ丘遊園などに行きました。

その頃の男の子の遊びは、ベイゴマや独楽回しや、1メートルくらいの竹を使ったチャンバラごっこで、女の子はままごとでしたね。

◆戦争の色が濃くなると

小学校が終わると、農家の子や丁稚奉公の子はほとんど高津青年学校に行きました。強制ではないですが、週1回の昼間の授業と週3回の夜学で、農家を手伝いながら通いました。鉄砲について勉強したり、運動も柔道や剣道など自由に選べて稽古するのですが、私は好きな剣道を選びました。今の帝京病院の前に警察があつて、そこに道場がありました。

昭和16年8月10日、当時のいわゆる産業戦士となって、近所の1年上の中村さんと一緒に鎌倉市大船の海軍燃料研究所に配属され、そこの寄宿舎に入りました。以前、松竹撮影所があつた場所です。そこには、12月8日の真珠湾攻撃が勃発するまでいました。

◆ついに召集令状が

昭和17年20歳のときに、兵役検査で甲種合格し、翌年21歳の12月1日に召集令状が来ました。甲府の49連隊に入隊しました。召集令状が来ても、へたなことを言うと恐い憲兵から「非国民！」と言われるので、親も「元気で」という当たり前のことしか言えなかったみたいだね。その時代は言葉だつて厳しくて、「ズボン」も英語とみなされていて兵隊たちは「はかま」と言っていました。ズボン下も「はかま下」ですよ。ズボン下と言っても軍隊のは国防色でゴワゴワしていて着心地が悪かつたで

すね。まあ、あの時代は女の人は男の人の後ろを3歩下がって歩いたし、手を繋ぐなんてとんでもない、今では考えられない時代でしたからね……。

その後、東京経由で下関に行き、関釜(かんぷ)連絡船に乗りました。この船は当時、下関と朝鮮半島南端の釜山の間を7時間かけて運航した鉄道連絡船です。今は、釜山をプサンと言いますが、昔はフザンと言いました。

それからは、満州、大連、旅順、青島と航海の日々です。

満州では、大豆を山積みにして12月6日に出港しましたが、シートを掛けずにいたら雨が降って全部ダメにしました。海からは見渡す限りの塩田が見えましたよ。

そこからは、北京に向かいました。炭鉾のそばに麦畑があり、その中のナツメ荘というところに12月から3ヶ月滞在しました。当時だつて自分たちはそこがどこなのか、わからないくらいだつたから今探しても、もっと所在地はわからないでしょうね。

食事はひどかつたですよ。味噌汁と飯盒はんごうのフタに盛り切りのご飯です。おかずなんて、たまに3センチ×2センチくらいの肉か魚がちょっと出るくらいです(笑)。

戦友と話をする暇もなかつたです。座っていると怒鳴られるし、上官が指で銃のホコリをすくって見つけると、大変な目に遭いましたよ。ただ、タバコだけは、けっこう豊富で先輩もくれましたね。貰つても、

吸う暇が無かったですが(笑)。それに上等兵は、質の良いタバコだったけど、我々少年兵は質の悪いタバコだったのでポケットに入れるとグチャグチャにほぐれて、吸えたもんじゃなかったねえ。

ナツメ荘には3ヶ月いて、3月初めには上海に行きました。港町に日本のメーカーの空いている倉庫があり、そこの3階で1ヶ月間、寝泊りしました。

上海では揚子江に行って、敵陣上陸の演習をしました。片手で銃を持ち上げて、水深が背丈くらいの海に飛び降りる練習です。靴とズボンを脱いで、ズボン下で飛び降りるのですが、なんせ水底がヌルヌルしているね。黄砂の影響か当時の中国の川は、ほとんど水が濁っていましたよ。

◆九死に一生を得て

私の乗船していた輸送船には自動車が20台、馬が20頭乗っていました。船底は畳1枚分のところに1年生が4人ほど座れるのですが、不安定で板の下に砂糖の袋を敷いていました。食事のときは、上官より位の下の方から3段上に座って食べるのですが、船が揺れて味噌汁を下の上官にこぼすと、よく怒られました。

4月15日にその船で上海をあとにして、26日には大変な目に遭いました。日にちを覚えているのは生死の境をさまよったからです。台湾とフィリピン間のハシー海峡で、魚雷を受けて撃沈されたのです。3、

200人のうち407人が助かり、少年兵で助かったのは私と麻生区出身の諸星君だけでした。吉田丸も撃沈されましたが、3、500人中850人が助かりました。撃沈されても軍艦「朝風」と「朝露」が助けにきてくれたのです。私は「朝風」に救われました。のちに上海の通信司令部にいた人が、そのときの状況を教えてくれてわかったのですが、当時輸送船13隻、軍艦12隻、飛行機3機が1度に攻撃を受けたようです。無事に帰港できたのは4隻のみだったそうです。弾薬を積んでいた「アマズテンシン丸」は、爆撃を受けて一網打尽に破壊されたそうです。この史実は文書に残っているようです。

軍艦「朝風」に乗った私は、次にマニラに上陸しました。4月27日に着いて3ヶ月いました。8月15日に出港して、26日に今度は、セレベス海でまた、魚雷をくらいました。私たちには、知らされていませんでしたが、どうも石油を積んでボルネオに行く途中だったようです。2,000人中1,200人が助かりましたが、この記録は残っていないようです。私は不寝番で起きていましたから、船の沈没していくときの様子ははっきりと覚えています。まず、船尾が斜めに沈み始め、上がった船首が燃え始めました。「物を持って飛び降りるなー！」と声が聞こえましたが、私は、泳げなかったので、トイレの敷板を引き剥がし、それを持って海に飛び込みました。

すると、すでに積んであった太い竹が海面に流れ出し浮いていました。「船から離れろー！」と、また声が聞こえたので、その竹を目指して泳ぎました。「竹には3人以上つかまるなー！」との声も最後に聞こえました。

いやはや、それから3日3晩、海に浮いていました。波が穏やかで海水のぬる湯に浸かっている感じで、とにかく眠くて眠くて・・・喉も渴いていましたが、特にあのへんの海水は塩辛くて飲めたものではありません。マニラを出るときに、海に投げ出されることもあるかと、フカに襲われないように赤ふんどしと、カンパンと鯉節を筒に入れて腰に下げていましたが、海水でカンパンはふやけて食べられないし、鯉節も海水が入り塩辛くて飲めたものではありませんでした。そして、3日後にやっと貨物船に救助されたのです。やはり、船底が不安定で、左右に同じ人数で座らないと傾く危険性があったのを覚えています。

◆終戦は

九死に一生を得た経験をした後は、コウモリのような形をしたセレベス島に上陸しました。この島のコーヒー畑には、日本に輸送できずに積まれてあった銃の火薬がたくさんありました。

セレベス島は火山島で、硫黄が採れたので火薬として用いられたのでしょうか。向かいがボルネオ島で、マカッサル海峡を漁船

で往復して警備に行かされました。昼間はアメリカの飛行機の狙い撃ちに遭うからと、夜暗いうちに兵舎を出ました。あまり暑くなく過ごしやすい土地でした。

そして、ここで終戦を迎えました。

玉音放送は聞いていません。隊長から「武装解除！」と言われても、何の感慨もありませんでしたね。その後、何ヶ月もセレベス島で畑を耕し、さつま芋、ウリ、ナスを作っていましたよ。畑仕事は昔から慣れていましたから、少年兵でも班長ですよ(笑)。自慢ではないですが、皆に教えましたね。

復員したのは昭和21年6月6日です。すぐ下の弟は兵隊に行っても3ヶ月で終戦、もうその頃の日本は、銃や水筒まで無かったようです。

実家は私の戦死の公報が来ないから、ずっと生きてると信じていたそうです。富士山の浅間神社の祈祷師にも私の安否を尋ねてくれたようです。そこでも「生きてる！」と言われたそうです。

帰還して、井田、小田中、二子、登戸など知り合いに挨拶しに行きました。皆、心配してくれていたようですが、母は、信じていたのでしょう、淡々と私を迎えてくれましたね。

◆その後の生活

私が戦争に行っている間は、当時学生だった3番目の弟が家を守っていてくれました。6月に村に帰ってきたことが知れ渡る

と、7月からさっそく、農家の組合長から組合の役員に任命されてしまいました。ゆっくり休む暇ありませんよ(笑)。まずはじゃが芋や、さつま芋から作りました。米の代わりに、国に供出するのですよ。出荷するときは帳面があって、「金一」、「山一」、「丸一」など省略した屋号の名前と持ってきたキログラムの重さを書きました。普通1貫5円で売れるものが、当時のヤミ市だと20円から30円の高値ですよ。

◆北見方の今昔

北見方の昔と今では天と地のごとく違います。昔は農産物で人が生活をしていました。雪が降れば道路が使えず皆が野菜を食べられず困りました。そこで私らは土を深く掘って、ネギや小松菜を作れば2、3倍高く売れました。しかし、終戦後は野菜に関しては多摩川べりでも植えることができたし、どこでも買えるようになりました。

夏祭りも昔はひっそりとしたもので、屋台などありませんでした。1年ごとに当番を決めて、四角の灯籠にお宮から正福寺まで道に明かりをつけました。

◆今、振りかえってみて

私は幸せ者です。両親や村の人から頼りにされましたから。

3, 200人中、生還した407人のうちの1人だし、北見方の空襲では自宅も焼けましたが命は助かりました。

学歴が無くとも、村役場の役員や町内会長などあらゆる役職を全うしました。これもすべて、一等兵のときに学んだ経験が大きいです。上官の洗濯やお茶出しなどを気を配って積極的にしていると、とても可愛がられ、小隊長の当番兵になりました。

人への思いやりや気配りは、人生にとって、大事だと思っています。

(平成30年7月6日取材)